

鹿児島島の昆虫31 水中で生きるカワゴケミズメイガ 昆虫担当 金井 賢一

カワゴケミズメイガは、羽を開いても一円玉くらいのサイズしかない、小さなガです。独特の模様をしており、灯火採集で白布に止まると目立ちます。



カワゴケミズメイガ成虫  
(撮影：福田輝彦氏)

本種は幼虫がカワゴケソウ科植物を食べるという、変わった生態をしています。カワゴケソウ科植物は国内では宮崎県の一部と鹿児島県にしか生えず、東南アジアなどの熱帯を分布の中心としています。急流の中に生え、根が変形した葉状体が溶結凝灰岩などにこびりつくようにして生えています。このような植物を食べるということは、幼虫も水中で生活しなければなりません。

2011年6月2日、志布志市の前川にカワゴケミズメイガの幼虫を撮影しようと、ガの研究者と共に訪れました。水の中をのぞくと、

カワゴケソウが膨らんだ構造が見られました。それは蛹でした。また注意深く見ていると、カワゴケソウを集めて作った筒状の巣から、からだを出してカワゴケソウを食べている幼虫の姿も見られました。

ミズメイガの仲間は水中で幼虫が生活するために、気管からハケ状のエラが出ているものがあります。

残念ながらこの幼虫は流水中でなければ生活できず、本当にカワゴケミズメイガになるかどうかという確認は取れません



カワゴケミズメイガの幼虫と思われる個体  
巣からからだを出して周囲のカワゴケソウを食べる

にはこの川沿いで灯火採集を行い、成虫の分布を確認したいと考えています。

鹿児島島の動物25 土用の丑の日といえば ウ・ナ・ギ!

動物担当 山田島崇文

ウナギは、本県での養殖が盛んで、昨年度は8199トン生産され〔前年同月比111.4%、平成22年漁業・養殖業生産統計(農水省)より〕、全国第1位です。特に、「土用の丑の日はウナギを食べて、夏バテを防ごう」などいわれ、食用として親しまれている魚の一つです。

このウナギは、どこで卵を産み、どこで稚魚が産まれるのでしょうか？実は、海なのです。しかもこの日本から約3,000Km離れたフィリピン沖なのです。稚魚は黒潮などの海流を巧みに使って、日本近海にたどり着きます。この頃には、稚魚は透明で、大きさは約5cmほどになり、シラスウナギと呼ばれます。秋から春にかけて河口でよく捕獲され、これを養殖しているのです。



写真1 シラスウナギ

しかし、シラスウナギは本来河川をのぼり、

そこで5~12年かけて成長すると考えられています。その後産卵場である遠く離れた海に帰るのです。いわば、一生の中で往復6,000km以上も旅行をしている魚なのです。すごい体力の持ち主なのかもしれません。

体を見てみると、ひれが腹になく、胸にはあり、背びれ・尾びれ・尻びれがつながるとい特徴があります。また、うろこは大変小さく、肉眼では観察できません。体色は背側が真っ黒から黄褐色、腹側は白色など変化に富んでいます。全体の大きさは70cmから100cm近くなります。



写真2 ウナギ

今月から始まる企画展「かごしま川の生きもの」に関連して、このウナギを館内に生体展示しています。ぜひご覧ください。



写真3 頭部の拡大